

【博士論文題目】 隠者を巡る諸問題の研究

【目次】

凡例

序文

本稿を著すにあたって

○長明の実像

○『発心集』について

第一編 「隠者」という語を巡る諸問題

はじめに

第一章 近代日本における「隠者」の語義の変遷について

第一節 隠者に関する先行研究の整理

第二節 隠者像の変遷の軌跡を捉える

一 隠者研究の第一段階

二 隠者研究の第二段階

第三節 折口信夫の隠者像の出处

第二章 歴史上における「隠者」という語の使用状況

第一節 中国の歴史的文献から「隠者」の語義を見る

第二節 日本の歴史的文献から「隠者」の語義を見る

第三章 「隠者」の類義語の存在と用例の考察

第一節 「隠者」の類義語の存在

第二節 中国の歴史文献から「隠者」の類義語を見る

一 類義語の混用

二 用例の分析

第三節 日本の歴史文献から「隠者」の類義語を見る

まとめ

第二編 日本中世の隠者像について

はじめに

第一章 日本人の眼に映った中国の隠者像

第一節 漢籍の伝来と当時の日本文人の愛読書について

第二節 漢籍に現れた隠者像

一 中国の正史に現れた隠者像

二 『世説新語』——竹林の七賢について——

三 『文選』——隠逸詩、および陶淵明について——

四 『白氏文集』——白居易について——

五 閑適詩と山水詩

第二章 中世の隠者像

第一節 中世以前の隠者像

- 一 『本朝文粹』・『続本朝文粹』から中世以前の隠者像を見る
- 二 『懷風藻』等の漢詩から中世以前の日本人に認識された隠者像を見る

第二節 中世の隠者像を模索する

まとめ

跋文

参考文献

【論文要旨】

隠者として名を残す鴨長明は、『方丈記』に続いて『発心集』を著わし、その中に、隠遁者の話が多く収録されているが、「隠者」という語の用例が見られない。隠逸思想の発展史が長く、隠者に関する定義は、時代や個人によってそれぞれ異なるのが避けられない事実であり、研究界においても、定説に止まらず、さまざまな角度から隠者に関して論じ続けられている。

現在、一般に認識されている日本の隠者は、仏教信仰を持ち、俗世間から離れて山野などに住む人である。彼らは現世より後世の幸福を求め、それに対して、中国の多くの隠者は、政治的な一面を有し、乱世や権力闘争を避けるために、或いは仕官したいにもかかわらず優れた君主を見出すことができないために身を隠す。そして、機会が到来すれば積極的に政治に参加し、自分の知識と能力を発揮し、世の中を幸福へ導いていこうと考えている。

しかし、日本の中世における「隠者」及び「隱者」の類義語の使用例を考察した結果、日本にも仏教的要素を持たない、朝廷に仕えないことによって隠者と称される人物の存在するが明らかになった。考えると、中国の隠者像も複雑で、一概には前述のようにはいえない。中国の隠者も多面性を持ち、体制に反抗する意欲がない隠者も多く見受けられる。

また、「隠者」、この語の語義と使用法も、歴史の発展に伴って変化していて、隠者についての諸問題を解決するためには、まず、研究の前提として、「隠者」、およびその一連の類義語の歴史上における使用状況を明らかにしなければならないようである。「隠者」は一体どのような人のことを指すのか。そこから論を始めたい。

一方、日本では、奈良時代から隠逸文学と見られる作品が現れたのは、『懷風藻』を紐解けば明らかである。そのような作品の産生要因の一つは、漢籍にあると考えられ、漢籍が日本に入ってきて、閑適と隠逸思想を含める作品が、日本の古代文人に受容され、文人たちの隠遁心理を啓発したと考えられる。平安時代前期に編纂された『日本国見在書目録』の中に、古代日本文人の愛読書と言われる中国の史書と、『文選』、『白氏文集』、『世説新語』などの作品の名称が列挙され、それに反映される隠者像は、当時の日本の文人に認識され、伝播されたと考えられる。中国は春秋戦国時代から唐まで、およそ一千五百年にわたって、発展してきた隠逸思想は、このように、七世紀に日本に一気に伝来し、故に、奈良、平安時代までの文献と文学作品に現れた隠者像は、多種多様で、中国の隠者の種類は殆ど反映されていた。それは、現在における隠者に対する印象とは、大きな差が存在する。

日本の正史において、隠者に関する記述が多くないが、『日本書紀』、『続日本記』、『日本後記』に、隠逸に関する描写が見られる。日本中世以前の漢詩文から、中国の隠者像の受

容状況を見てみると、『本朝文粹』に「幽隠」篇が設けられ、『懐風藻』をはじめ、『菅家文草』『経国集』、『凌雲集』、『扶桑集』『本朝無題詩』に、さまざまな隠逸に関する詩文が挙げられる。それに基づいて、日中両国における隠者の共通点と相違を少し明らかにすることができるだろう。

また、日本の仏教は、奈良時代に始まった山林修行を継承し、平安時代に入ると人里を離れて山の中に入り修行することが流行していた。寺院の古文書はもちろん、六国史の中にも、「山林」という語は、常に寺院と仏教徒に対する叙述とともに現れ、仏教と隠逸とは、交差点が現れた。つまり、仏教徒も隠者も、常に同じ場所、「山林」にいる。さらに、日本の漢詩集には、僧侶の詩文も収録されている。『懐風藻』の中に収録される僧侶の作品を見ると、その内容は文人貴族によって著されたものと、基本的に差がない。僧侶、特に儒教と道教を精通する学問僧の形象は、確かに隠者とかぶり、後の日本人は、彼らを隠者として扱うのも理解でき、仏教的山林詩は、現在日本における「隠者文学」の発端であると考えられるだろう。

本論は、「「隠者」という語を巡る諸問題」と「日本中世の隠者像について」という二編から構成される。

第一編では、近代における「隠者」という語の変遷から始め、「隠者」およびその類義語を時代順に従って語義を考察し、歴史文献からの使用例を集め、それらの語の使用状況を明らかにする。

第二編では、中世、特に鴨長明が生きていた鎌倉前期の隠者像を明らかにする。長明の隠逸観や隠者像に影響を与えたのは、平安文人の作品以外に、日本に伝来した漢籍も考えられる。本編においては、中国から将来された漢籍と、日本中世以前、特に平安時代までの漢詩文の中の隠逸的要素を考察しながら、長明が認識し、憧れた隠者の姿を描きだした。